

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	世田谷区弦巻 3-15-5
園名	世田谷区立弦巻保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自分で作るって楽しいね！木製遊具を使って広がる想像力

<テーマの設定理由>

木製遊具は保育の中に日常的にあり、小さな時から触れて過ごしている。年齢により木製遊具への関心の広がりとは異なるが、異年齢での活動の中で刺激を受けて更に興味関心を深め、探求心を養い発展させるため。

2. 活動スケジュール

6月：つるまキッズ コーナー遊び（積み木で遊ぼう）
7月：つるまキッズ コーナー遊び（積み木で遊ぼう）
9月：つるまキッズ コーナー遊び（積み木で遊ぼう：板を使って立体に！）
10月：だいすキッズ 縦割り活動（グループの名前を決めよう）
12月：だいすキッズ 縦割り活動（お化け屋敷を作ろう）
1月：つるまキッズ コーナー遊び（積み木で遊ぼう）
3月：だいすキッズ 縦割り活動（お化け屋敷を作ろう）

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・イメージが膨らみやすい素材や道具（平面から立体へ想像力が広がる環境）
…積み木（円錐、六角形のチップ型、円形の薄型など）、ジュエル積み木、木製の箱や板、可動式遊具（L字型、長板、短板、仕切り板など）
- ・子どもが主体的に遊び始められるような環境作り（棚の設置など）
- ・大切に作品をとっておくための環境作り（ワゴンなど）

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ① 積み木の置き方の発見と指先に集中する面白さの発見（3歳児）
- ② 色や形、様々な積み木を組み合わせることで生まれる創造力や創意工夫（4歳児）
- ③ より本物に近づけたい、積み木選びから広がるイメージの共有（5歳児）
- ④ お化け屋敷を作ろう～可動式遊具を使っの活動～（縦割り保育）

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

- ① 異年齢児が遊ぶ積み木を見る機会が増え、積み木への興味が強くなっていった。積み木を同じように積んでみたいという思いから始まる。「どうやって作ろうか」「こうするんじゃないかと高くしたいんだよ」とやりたいことを保育士や友だちに手の仕草で伝えている。身振りから予測すると、平らに置くのではなく、縦において高さを出したいことが分かった。そして、実際にやってみることになる。高く積み上げる楽しさやバランスをとるために指先に集中する面白さに気付いたようであった。崩れてしまっても「もう一回!」と挑戦する姿が出てきた。
- ② 積み木をきれいに並べて遊んでいる。保育士が「うわぁ～上手に並べたね」と声をかけると、作業する手元から目を逸らさないまま「ここは溶岩なの」と赤い積み木の側面を並べながらA君が教えてくれた。Bちゃんが「ここは火山だね、A君とBで作ったの」と誇らしげな表情で話している。几帳面な2人だからか、イメージも重なり積み木の似た色同士でも揃えられている。いつになく真剣な様子…。するとCちゃんが壊さぬように身をかがめ、板の積み木の下をそっと眺めていた。中央部分に目をやると高さをだす柱の部分は異なる積み木で作られており、「これすごいよ、よく考えたね」と声をかけると「…ちょうどいいでしょ」との返事。上手く説明できない様子もあったが、それよりも遊びに夢中である雰囲気、細長いカラー積み木とレンガ積み木とを組み合わせ柱を安定させるためにも、上の積み木を望み通りにきっちりと板に並べるためにも、はたまた2つの板の高さをほぼ一緒にするためにもと見て取れた。



- ③ 色々なイメージをしながら構成することを楽しむ姿があった。
積み木を出してみると、色々な発想が湧いてきたようで、この日は友だちと一緒に” アナと雪の女王”のお城をつくっていた。
ジュエル積み木を手にとって、「こっちは入口ってことね。」
「キラキラの積み木が氷みたいだね。」とイメージを共有し、
自分たちのお城を大きくつくりあげていた。「お姫様のお城もつくろう」と素敵なお城を完成させていた。友だちと思いを共有しながら一つのもので作り上げる楽しさを味わっているようだった。



- ④ だいすキッズ（縦割り活動）では5歳が中心となって『お化け屋敷作り』が始まった。「この板をもってきて！」「ここをお化けが隠れるところにしよう」と意見をどんどん出してイメージが広がっていく。3，4歳も5歳の真似をして、一緒に組み立てようとする。「お化け屋敷だから、受付とチケットも作らなくっちゃ！」「葉っぱとお花を集めればいいよ！」「じゃあ私がとってくる！」と必要なものをすぐに相談して形を作っていく。4歳児、3歳児も一緒になって隠れてみたり、お化けになりきって怖い声を出したりしていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ① ・平らに置くのではなく、積み木を横に立てて積むことで高さが出ることが分かり、それによっての崩れやすさ（難しさ）を理解していた。
・高くなっていくことで周りの友だちの興味が動いていた。積み上げている友だちをサポートしてあげようと積み木を手渡してあげたり、他の友だちがぶつかったりしないように知らせたりしながら協力している姿が見られた。積み木の特性に気づき、遊びを継続し深めるための工夫を子どもたち自身が考えているのを感じた。
- ② ・多様な積み木があることで、想像したものを形にしやすいくなり、繰り返し遊ぶ姿が見られた。特に板は2階建てにするなど、構造を変えやすく、遊びが発展するきっかけとなっていた。いかに崩れずバランスを取るためにはどうしたらよいかを考える中で、各々の積み木の厚さを捉え、水平にするなど工夫する姿が見られたことは新鮮だった。
・複雑な積み木を構築する中で、友だちと一緒にイメージを共有したり、遊びを発展させたりすることを楽しむ様子がある。高さを整えたり左右対称にしたり、また似たような色合いのものを選んで仕上げていたり、美しさを感じているような様

子も後半は見られ始めていた。日々の遊びの中で、常々作ったもので継続して遊びたい思いが芽生えたり、周囲もきれいに並べられたものを認めて壊さないように動いたりする様子が定着している。

- ③ ・キラキラ積み木やパステル積み木が加わったことで、「青は海、白と透明は雪」など、色からイメージを膨らませて作ろうとする姿が見られた。お家作りやお城作りなど、色合いにこだわった作品を作り上げることが多く、普通の積み木だけでなく色つきのものが加わったことで、よりイメージが広がりやすくなったように感じる。
 - ・表面上の見た目だけでなく、内部に階段を作ったり隠し部屋を作ったりと、細部（内部）にまでこだわった作品を作る姿が後半は増えていった。
- ④ ・可動式遊具を使ってのお化け屋敷作りは、今までの活動や遊びの中での経験が積み重なったの姿だと感じた。板の組み方もバランスを取りながらグラつきがないように調節したり、安全面も考えられるようになってきていると感じた。
 - ・可動式遊具も総数が増えたことで、一つの物を作ろうとしたときにダイナミックな設定ができるようになり子どもたちも、一つのテーマで作ろうとする中にもこだわりのポイントを作るなど、十分楽しめるようになってきていると感じた。